

スーパー読者の
経営力が選ぶ

あの商品この技術

20

区画が狭く、土質も傾斜もまばらな強湿田に囲まれる小泉輝夫氏。できない現状に嘆くより、「やると決めたらやる」を信条にして、毎冬の暗渠工事、徹底した機械償却費の削減、乾田直播を目指した湛水直播栽培を実践する。目指すのは、いかなる状況にも対応できるフレキシブルな経営だ。



千葉県成田市

小泉輝夫 氏

【経営データ】

■年間売上／2000万円 ■経営面積／25ha ■生産作物／コメ18ha（コシヒカリ、ひとめぼれ<直播>、アキヒカリ、ふさおとめ）。青大豆7ha ■労働構成／本人、父、弟（季節雇用） ■売り先／コメは全量農協出荷。青大豆は地元豆腐屋で豆腐にして大手スーパー、地元スーパー、直売所に販売。

※■の数字は資料請求番号です

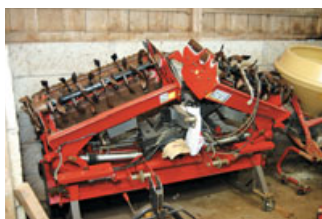
▶コンバイン（井関農機株）「Japan HJ682J」

近所の農機店から、およそ80万円で購入した6条刈りコンバイン。購入当時、ギアシャフトの老朽化や、HSTの油圧タンクに入ったクラック、各搬送チェーンのギア心棒の劣化など、外見以上に消耗が激しく、その農機店から「これだけはやめておけ」と警告されたもの。実際、一応の点検をしたにもかかわらず、「刈り始めて10mで止まってしまった」。それでも、コメの低価格と逆行する値段で販売される農機に違和感を覚える小泉氏は、あえて安い中古機を使い、それに伴う不便は自身の機械整備技術で補う。搬送チェーンはスクラップから持ち出したギアをつなぎ合わせ、ギアシャフトは金属加工屋に硬度を計測した上で切り出し交換。オイルが漏れ出したHST部は親戚の元レースメカニックに頼んで溶接した。いかなる状況にも対処できるネットワークを周辺に築く小泉氏は、「機械に直せないものはない」と断言する。

田畑輪間リバーシブルプラウ
（スガノ農機株）「PROY123J」



▼小泉氏の代かき作業はとても素早い。仲間からは「モータポートか」と言われるそうだ。それができるのは、写真左下の12インチプラウによる秋起しの後、土を真冬の寒にさらすため。表層に霜が降り、それが溶けた凍るを繰り返すうちに春にはパラパラの土になるという。プラウ耕でできた盛り上がりや圃場そのものの凹凸も、ウイングハロー（写真下）の排土板で事前にならしておけば（場所によってはロータリを浅くかける）、代かきの時間を短縮でき、土の練りこみ、機械の圃場走行を最小限にとどめることができる。「碎土や表層鎮圧を考えるとパーチカルハローの導入も考えたが、雑草の埋め込みを考えると横軸型がいい。ロータリの爪を土の表層に引っ掛けようと思えば土へのダメージを最小限にできる」という。



ウイングハロー
（松山機「HVS3800BR」）

粉雪が舞い降りる圃場には、幾筋かの溝が走り、傍らには暗渠用の素焼きの土管が転がっていた。レーザーで正確な傾斜を取り、溝掘機を走らせる暗渠工事は、小泉輝夫氏が毎冬行う「ひと仕事」だ。「自分が経営を受け継いだ7年前から毎年欠かさない。この強湿田を汎用性のある農地に変えなければ、経営に未来がないと思っている」周りからは「田んぼでそんなにやる意味があるのか」と言われることもあるが、その信念はまだ揺るがない。7年越しに業者の技術を盗み、今では業者から機材を借りひとりで作業する。

小泉氏は現在25haほどの経営面積を持っているが、その環境はけっして恵まれているとは言えない。一区画の面積が狭いうえ、昔、山を削って作った田が大半で、傾斜も土質もバラバラ。おまけにパワーショベルで掘ると所々水が湧き出てくる。「自分は、圃場の透・排水性を向上させ乾田化を目指しているが、あくまでも稲作にこだわるつもり。今後、



溝掘機 (松山株)「OMÉSO A」

小泉氏の周囲4kmに散在する圃場は、基本的に強湿田。その中には、ところどころ湧水が噴き出すところや複雑な勾配があるところ、1枚の中で土質がまだらなところなど土壌改良が困難なところも多い。写真右上は、毎冬欠かさず行う暗渠工事中の圃場。暗渠には、土圧で潰れやすいコルゲート管ではなく、素焼きの土管を使う。今後も稲作を経営の中心にする意向だが、水田でしか使えない圃場では多様な経営が不可能と、畑地化を目指し独学で暗渠工事を習得した。管を埋設する溝は、写真上の溝掘機で。水道出口から入口に向かって徐々に深さを上げながら掘り進む。正確な勾配の溝を作るために欠かせないのは(株)トプコン社製レーザー (A)。中空の仮想基準点をガイド上の受光器 (B) が受信することで、目視の錯覚に左右されず掘り上げた溝を正確な深さに補正できる。難点は溝掘機のマストの深さが65cmしかなく、勾配を大きく取れないこと。すぐにでもマストを延長しようと考えている。写真Cのコンバインを改造した運搬車は、土管を運ぶために使用する。



何年前か、大豆用に小泉氏の父親が自作した耕うん・除草・播種をこなす複合機。トラクタフロントの200ℓタンクに種子を入れ、後部リンクに付くロータリ後方の播種機で播種する。制作費はほとんどかかっておらず、4日で7haの播種を完了する。小泉氏はこれを畦畔除草に使うことを計画。旧式のため、片側のロアリンクを独立制御できなかったが、油圧を追加し、右ロアリンクを手元のレバーで上下させることができるように改造した。こうすることで右ロアリンクに取り付ける除草剤散布用のノズル (3~4頭口を予定) の位置を変えることができ、畦畔のノリ面に沿っての散布が可能になる。散布時期は、3月後半ごろの畦塗後で、「劇的な省力」を期待しているとのこと。



米価やコメを取り巻く環境がどう変わっても、それに応じ自由に圃場を使い回せるように、フレキシブルな体制を作りただけ」

フレキシブルな経営を目指す取り組みは、農地改良だけにとどまらない。格安の中古農機の使用で徹底的に機械償却費を削減し、試験的に直播栽培に取り組んで、どれだけ安くコメを作れるかに挑戦する。

「高い値で売れることを覚えた経営をシエイプさせるより、生産コストを極限まで下げたうえで、価値に応じた価格を上げることが順応性がある」

実際、小泉氏の敷地内には、所狭しと中古の機械がひしめいている。約80万円で購入した6条刈りのコンバインは、「シーズン中、修理に3度徹夜した」というほどの難物だったが、父親譲りの機械好きに、自動車整備工あがりの機械整備技術を駆使し、今や「主力」に格上げされている。

経営の幅を考えて将来的には乾田直播に取り組むことに決めているが、田一枚の狭さ、個人で水を切れない事情から、現状は鉄コーティング種子を使った湛水直播を選択している。

「決めたたらやるが信条。暗渠も乾田直播も絶対に完成させる」と、滑らかな口調は朗々と将来像を語っていた。

(野村大樹)